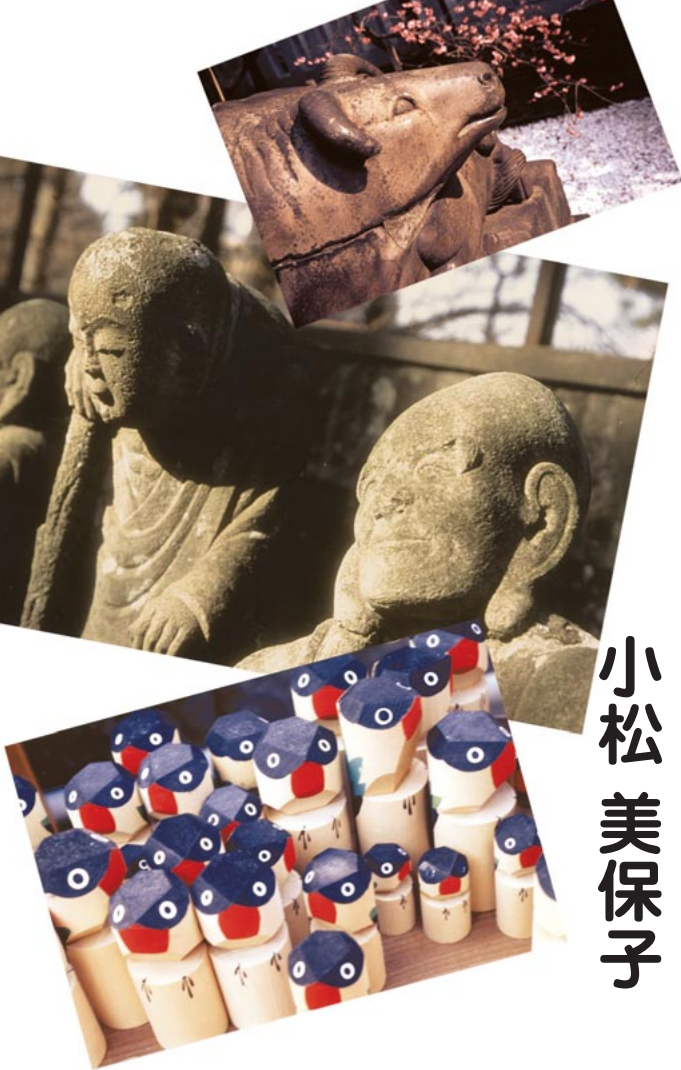


神さま仏さま探訪記

ご利益をたどれば日本人が見える

小松美保子



『Boon-gate』のPDF作品を ご覧いただく前に…

操作について

- 作品の多くは「もくじ」のページで、進みたいページの項目を押せば、そのページまでジャンプし、また、ジャンプしたページのタイトルを押せば、目次のページに戻るよう設定しております。
- 直前に開いていたページに戻るには、画面上の「◀」ボタンで、直前に開いていたページに戻ります。

読み方いろいろ

- 通常は画面の「倍率」が100%前後になっていますが、「倍率」を150%まで高めると文字が読みやすい大きさになります。
- 通常は「見開きページ」で設定されていますが、「単一ページ」にすると読みやすく感じます。
- 読み進めるときは、「十字キー」を使用すると手軽です。
- 「サムネイル機能」を使用して読み進めると、2～3頁からとばし読みするのに便利です。
- 頁を「回転」させることが可能です。地図などを拡大して見るときに便利です。

http://www.bungeisha.com/PDF_is/05-top1.html でPDF作品についての説明を致しております。ご参照ください。

神さま仏さま 探訪記

ご利益をたどれば日本人が見える

小松 美保子

神さま仏さま探訪記◎目次

第一章 心のふるさと氏神さま・鎮守さま

..... 16

I せめて一生に一度でも——庶民の夢だったお伊勢まいり 16

民族の総氏神・伊勢の神宮／江戸時代、お伊勢まいりが大流行／神気に浸って、身も心も清々し／二十年に一度、式年遷宮は生命新生の儀式／神宮にいまも生き続ける古代のハ
イテク

II 大社から村の鎮守さままで——複雑な歴史を辿った八幡さま 28

ご利益も世につれ——八幡さまの歴史を辿ってみれば／特異な性格の八幡さま／八幡信仰根元の社、謎を秘めた宇佐神宮／国家鎮護のために創建された京都・石清水八幡宮／頼朝の精神的よりどころだった鎌倉・鶴岡八幡宮

III 天皇・将軍さまから土地つ子まで、氏神と崇めた日枝山の神・山王さん 39

山の神から皇城鎮護の神になった山王権現／山王さんの総本宮・近江の日吉大社／結婚からお子神誕生までのドラマを御輿ぶりでつづる近江山王祭／江戸城鎮護・将軍家の氏神——江戸山王社・日枝神社／将軍さまも芝っ子も熱中した
天下祭・江戸山王祭

第二章 商売繁盛・福の神

..... 49

I 田の神から現世利益のデパートになった人気神・お稲荷さん 49

人気の秘密は現世利益に徹した稲荷信仰／初午は稲荷神降臨の記念日——お稲荷さんと狐の親密な関係／田の神から殖産・商売繁盛の神に——稲荷信仰全国に広まる／お山は現世利益の豊庫——伏見稲荷のお塚信仰／お寺の稲荷神は吒枳尼天——豊川稲荷発展の立役者・大岡越前守／いまも健在——東京銀座のお稲荷さん

II 海漁の神から商売繁盛の神になった西の戎さん 62

漁の神から商売繁盛の神になった西の戎さんえいさ／釣りがご趣味の美保えびす——特殊神事で知られる美保神社／信仰拡大に一役買った人形操り——西宮えびすのご本家西宮神社／大阪の祭りは十日戎で始まる——商売繁盛・今宮戎神社／えびす講の元祖——旅えびす・京都えびす神社

III 農耕の神から商売繁盛の神になった東のお酉さま 73

熊手も世につれ——西の市で有名、浅草の鷲神社／西の市はこちらがご本家だった——花畑の大鷲神社／お酉さまのル

1ツは穀神——武蔵国の古社・鷲宮神社／お酉さまの祭神
となつた神話の人氣神・日本武尊

IV お正月に勢揃い、摩訶不思議な福の神集団・七福神 82

人氣の新春七福神巡り／なぜ七福神なのか／洒落心しゃれから生ま
れた隅田川七福神／墨堤を歩いて、七福神の戸籍調べ

第三章 受験期は超ご多忙、知恵と学問の神さま仏さま …………… 95

I 梅の花と牛がシンボル、学問の神・天神さま 95

天神信仰はなぜこれほど広まったのか／菅公の御廟、天神さ
まの総本社・太宰府天満宮／怨霊信仰から学問の神へ——
もう一つの総本社北野天満宮／農耕の神から学問の神へ——
—谷保天満宮／凶を吉に——うそ替え神事で知られる亀戸
天神／菅公がこよなく愛した天神さまのシンボル・梅の花
と牛／菅原道真を祀る神社

II 三人寄れば文殊の知恵、知恵を授けてくれる文殊さん 107

合格祈願の祈祷も行っている山形の亀岡文殊／「三人寄れば
……」発祥の地・丹後切戸の文殊／観音さまと手を結び、
ぼけ封じ霊場をつくつた大和・安倍の文殊さん

III 知恵もらい十三詣り、知恵と福德の虚空蔵さん 113

十三詣りの元祖・嵯峨の虚空蔵さん／奇祭裸祭りで見られる、
会津・柳津の虚空蔵さん／このほかの有名な虚空蔵さん

第四章 善も悪も強さも弱さも併せて人間的な神話の神さま …… 120

I 神在月、八百万の神が出雲に大集合——縁結びの主宰神・大国主命 120

縁結びの総本家・出雲大社／神議りの神事・神在祭／大国
主命がなぜ縁結びの神に

II 孤独・絶望を乗り越えて英雄神になった神話界のスター・須佐之男命 127

須佐之男神さん人気の秘密／祇園祭で有名、京都の祇園社八坂神
社／尾張津島天王祭も疫病送りの祭り／ふるさと出雲から
遷し祀られた武蔵一の宮・氷川神社

III 医薬・酒・温泉開発の先駆者、大己貴命と少彦名神 137

医療厚生に尽くした名コンビ、大己貴命と少彦名神／薬と酒
の神さま、古社・大和三輪の明神さん／薬業界の守護神—
—神農さん、少彦名神社／黄門さまもご信仰——磯のお洗
さま・大洗磯前神社／開運湧福・長寿健康——ゆぜんさま
・以和貴湯泉神社

IV 奇祭「おんばしら」で知られる、信濃のお諏訪さま 148

神代以来の古社、信濃一の宮・諏訪大社／六年に一度町中が
血を沸かす奇祭・おんばしら

第五章 信ずるから効く、効くから信ずる。現世利益の仏さま …… 158

I 自在に姿を変えて人々の願いに応えてくれる優しい母・観音さま 158

「南無観世音菩薩」——ひたすらお名を唱えるだけでいい／

現世利益のスーパーマーケット、浅草の観音さま／鎌倉時

代に始まった、坂東八州祈りの旅／秩父霊場を加えて百観

音巡礼

II 苦しいときこそ強い力にすがりたい、厳しい父・お不動さま 179

不動信仰のメッカ・成田山新勝寺／目黒・目白・目赤・目青

・目黄——現在も健在、江戸五色不動／一都三県、関東三

十六不動霊場

III 大寺院から野末の祠まで一万余。病いを治し、苦悩を癒してくれるお薬師さ

ま 196

まさに現世利益のお薬師さま／治眼と子育てのご利益で有名

——東京の新井薬師／中国一円に広まった一畑信仰、出雲

の一畑薬師

IV 路傍に街角に、その数知れず。身近なほとけ・お地藏さん 208

路傍に立つお地藏さんは、まさに庶民のほとけの代表者／極

楽浄土への案内役——地獄の救済者・地藏菩薩／町や村の

守護・道しるべ——路傍の石のお地藏さん／子どもの守り

仏・地藏菩薩／京都の夏の風物詩、地藏盆は子どものもまつ

り／心身の苦を抜いてくれるお地藏さん西・東／究極の慈

悲、身代わり地藏——われ代わって苦を受けん／ニツクネ

ームでご利益がわかる

第六章 インドから来た仏神さま 230

I 弁才天から弁財天へ。七福神の紅一点・弁天さま 230

弁天さまの戸籍調べ／天台宗の学僧たちも修行した琵琶湖・

竹生島の弁才天／裸形の妙音天で有名——相模・江の島の

弁財天／まさに弁財天——鎌倉佐助ヶ谷の銭洗弁天

II 食人鬼から子育ての神に大変身、ツノの取れた鬼子母神 241

鬼女から子育ての神に——／お会式でも子どもが主役、雑司

ヶ谷の鬼子母神／霊験に 恐れ入谷の鬼子母神

Ⅲ 観音さまの慈悲で邪神から仏神になった聖天さん 249

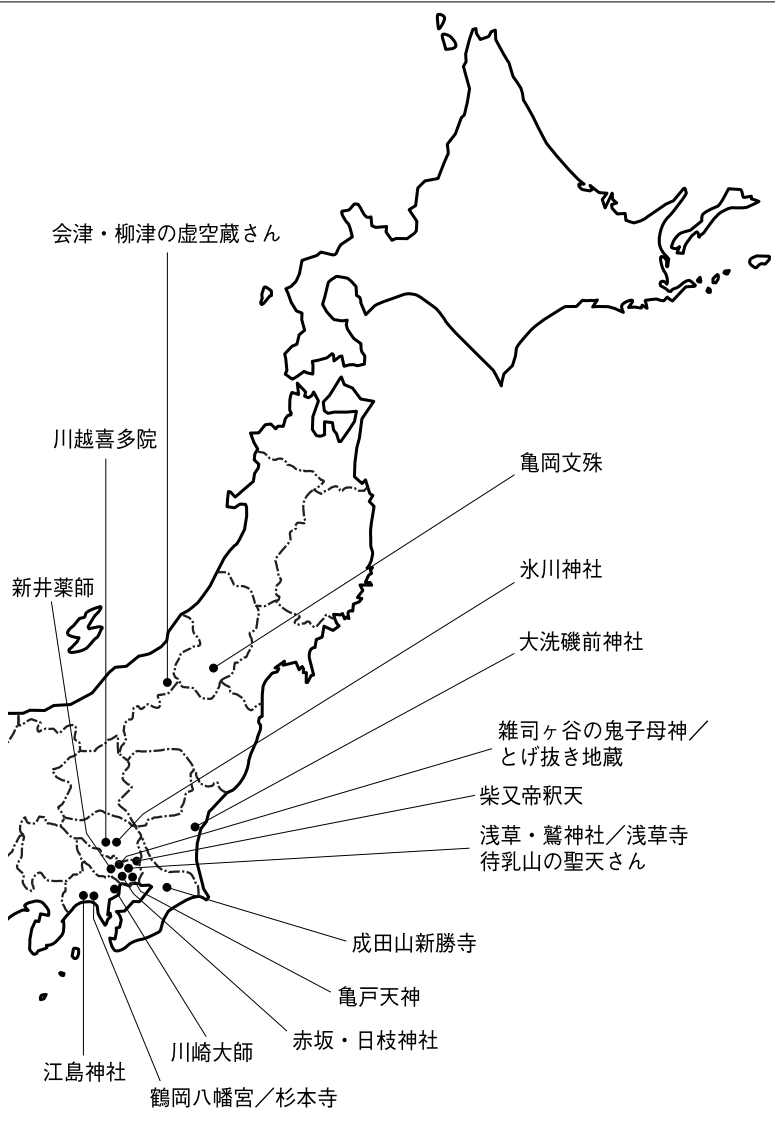
象頭人身・男女抱擁の双身像——聖天さんと観音さまの深い関係／大阪商人に絶大な人気、生駒の聖天さん／水商売の人たちに熱烈信仰された、待乳山の聖天さん／強烈な聖天信仰の秘密は

Ⅳ インドの鰐神がお山の神と習合して海の守護神となった金毘羅さん 257

船人たちが熱烈信仰した金毘羅大権現／信仰とレクリエーションの旅——江戸時代に盛んになった金毘羅詣で

Ⅴ 土俗信仰と結びついて庶民信仰の寺となった柴又の帝釈さん 266

寅さんの登場で一躍有名に／江戸時代、庚申信仰とドッキン
グ／江戸から柴又へ柴又へ、帝釈さんは庚申詣りで大賑わい



会津・柳津の虚空蔵さん

川越喜多院

新井薬師

龜岡文殊

氷川神社

大洗磯前神社

雑司ヶ谷の鬼子母神／
とげ抜き地藏

柴又帝釈天

浅草・鷲神社／浅草寺
待乳山の聖天さん

成田山新勝寺

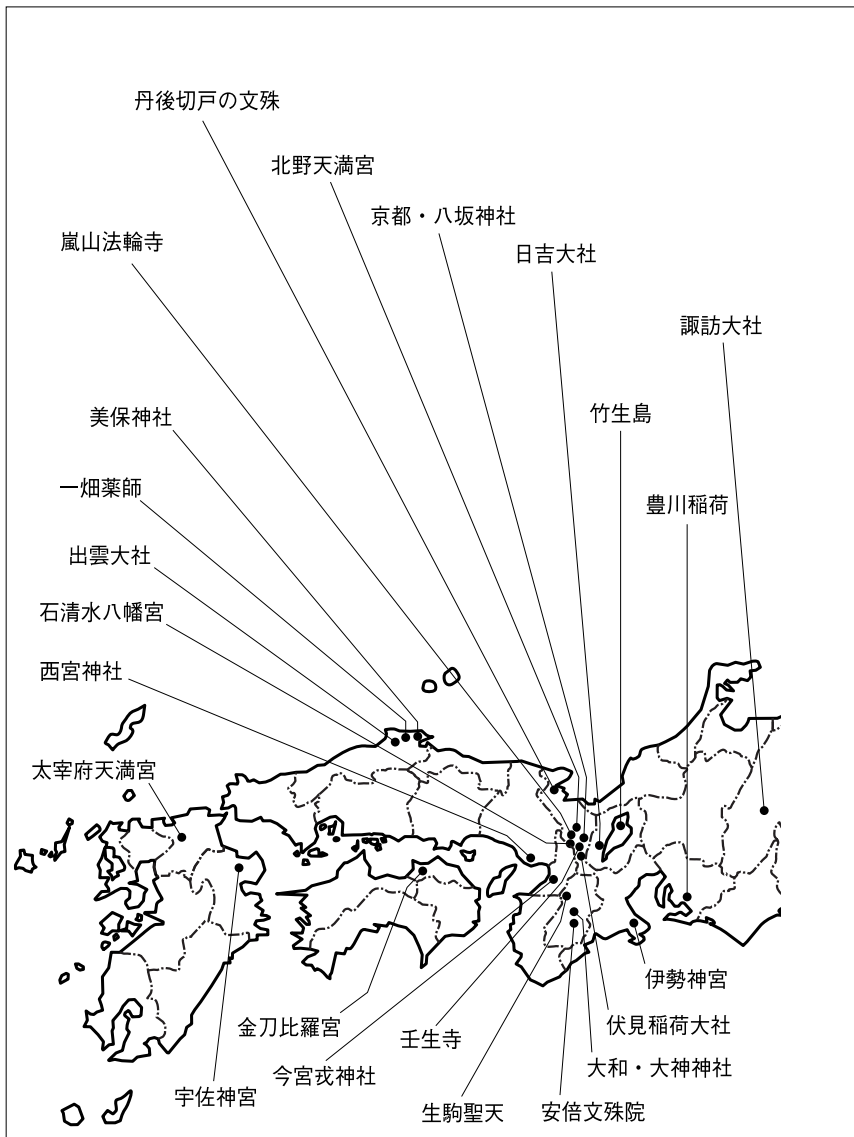
龜戸天神

赤坂・日枝神社

川崎大師

江島神社

鶴岡八幡宮／杉本寺



神さま仏さま探訪記

第一章 心のふるさと氏神さま・鎮守さま

I せめて一生に一度でも——庶民の夢だったお伊勢まいり

民族の総氏神・伊勢の神宮

伊勢の地に鎮座するところから、昔から「伊勢神宮」とか「お伊勢さん」と呼ばれているが、正式の名は、ただ二文字「神宮」である。

一般的に内宮と呼ばれる皇大神宮は、伊勢神路山の麓、宇治五十鈴川のほとりにあつて、祭神は皇室の祖先神とされ、神々の頂天に立つ天照大神で、ご神体は三種の神器の一つ、八咫鏡である。

外宮の豊受大神宮は、同じく伊勢高倉山の麓・山田原にあり、天照大神の御饌都神（食べ物を司る神）豊受大神を祭神とする。

神宮という場合は、この内宮、外宮の両宮、さらに正確に言えば、この両宮の別宮や摂社、末社、所管社を含めて百数社の総称である。

では神宮の創始はというと、はるか遠い昔、三世紀頃まで遡ることになるという。

古伝によると「この鏡を見ること、われを見るが如くせよ」と天照大神から授けられ、以来皇室の象徴として、代々大和の天皇のもとに受け継がれてきた八咫鏡が、十代・崇神天皇のとき、笠縫邑に遷され、その後、各地を巡幸した末、次代・垂仁天皇の二十六年に、五十鈴川の川上の現在の地に鎮め祀られたとある。

これが内宮のはじめで、外宮については、二十一代・雄略天皇の五世紀頃、天皇の夢に天照大神の神託が下り、御饌都神として丹波国・比治の真奈井原から豊受大神を迎えて祀ったのがはじめとされる。祭神・天照大神については諸説があり、難しくして私にはよくわからないが、古来、農耕民族であった日本人にとって、稲は生きる糧であった。この稲に生命を与え育む太陽を日の神として崇ぶ信仰があつて、その上に天孫族（天皇家）の祖神としての天照大神信仰が結びついて、民族の御祖神、総氏神という信仰が生まれた、という考え方は、二十年に一度行われる式年遷宮をはじめとして、年ごと日ごとの伝統神事をみても、うなずける気がする。

江戸時代、お伊勢まいりが大流行

● 弥次さん喜多さんも出かけた

このように、皇室の祖先神、日本民族の御祖神という特別な存在だった神宮が、庶民信仰の対象にな

るのは、おそらく室町の頃からしく、江戸時代になると、レジャーを兼ねたお伊勢まいりが盛んになり、農民も商人も一生に一度の夢として、伊勢を目指したのだった。

弥次さん、喜多さんも出かけた。

「伊勢参宮より足引あしびきの大和巡りして花の都に梅の浪花なみわへと心ざし」て、朽木草鞋くつきわらじの足もと軽くお江戸をあとにしたのは神田八丁堀かんだやちやく辺に独住ひとりずみの弥次郎兵衛やじらべゑと食客いさうろうの喜多八きだやちで、時は享保きやうほの頃、うらかな初春のことだった。(十返舎じつべんしゃ一いっ九く作『東海道中膝栗毛』より)。

というと、いかにも気軽に出かけたようだが、当時江戸の外に出るには、けっこうわずらわしい手続きやら何やらが必要だったらしい。弥次さんは、まず旦那寺だんなでうらに百銅ひゃくどうを包んで往来切手をもらい、大家おおやにたまった店賃たなちんを払って、代わりに関所手形を受け取っている。往来切手というのは、さしずめ現在のパスポートのようなもので、こうした仕事は旦那寺がやった。また、名主なぬしとか大家おおやが発行する関所手形がなければ旅行はできなかった。

とにかく一泊、二泊で気軽に旅行できる現在とは違って、『山鳥の尾の長旅なれば——』金にかえられるものは金にかえ、がらくたは処分し、漬菜おぼしの重石おもしと炭かき包丁はお隣りに残し、ちぎれかけた縄すだれと油壺はお向かいさんに譲って、身上しんしやう残らず風呂敷ふろしきに包み、二人は心おきなく旅立ったのだ。た。

品川から小田原、箱根の山路を越えて沼津、府中、島田へ。水逆巻く大井川もなんとか無事に渡り、

舞坂、岡崎、鳴海とやってきた弥次さん喜多さん、尾張・熱田あつたの宮宿から波静かな海上七里を乗合船で渡っている。

桑名の船着場の一の鳥居はいまもある。桑名から四日市の日永追分ひながわいわけまでが東海道で、そこから分かれて伊勢街道に入る。途中、伊勢別街道や初瀬街道、和歌山街道を下ってきた参宮者と合流して伊勢の小俣まで、ひたすら南下する。いまでもこれらの街道には往時を伝えて常夜灯が数多く残っている。

お伊勢さんほど御大社はないが

なぜに宮川 橋がない

伊勢山田の入口に横たわる宮川には明治になるまで橋がなかった。だから各地から神宮を訪れる人々は、この川を渡し船で渡って山田に入ったのである。大和や和歌山、熊野方面から来た人たちは田丸から俗に柳の渡しと呼ばれる上の渡しを、一方伊勢街道を南下した京坂や関東の人たちは小俣から桜の渡しと呼ばれる下の渡しを渡って神宮の街・山田へ入った。

●団体ツアーもヒッチハイクもあった

ところで、室町時代から始まったといわれるお伊勢まいりが本格化するのには、江戸時代に入ってからである。

東海道という幹線道路を整えたのは徳川家康だった。五十三次の宿駅しゆくえきを設け、里程をはかつて一里

塚を築き、街道の両側に松の並木を植えた。その街道を参勤交代の大名行列も通ったし、商人が、巡礼が、そしてお伊勢まいりの農民たちも往來した。各宿駅には本陣、脇本陣が、そして旅籠も次々とできた。

当時、庶民が長い間土地を離れることは難しかったが、お伊勢まいりの大義名分があれば別だった。旅行が手軽に日常的になったいまでも、旅には、なにか夢があり期待があり、解放感がある。ましてや生活と土地の重圧に身動きできなかった当時の農民たちにとって、お伊勢まいりの旅は一生の夢だった。

伊勢に行きたい、伊勢路が見たい、
せめて一生に一度でも (伊勢音頭)

ところで、一口にお伊勢まいりといっても、いろいろなスタイルがあつた。弥次さん喜多さんのような気儘な個人旅行もあれば、伊勢講、神明講といった団体ツアーもあつた。お伊勢さんに止まらず、四国の金比羅さんや信濃の善光寺まで足を伸ばす長期旅行者もいれば、抜けまいりといって、親や主人に内緒で着のみ着のまま抜け出す奉公人もいた。いまでいえば幼稚園や小学校低学年くらいの子どもの一人旅も珍しくなかつたらしい。ろくな旅の準備もなく、ほとんど路銀も持たない抜けまいりの民衆は、道中、宿場宿場で人々の施行を受けながら伊勢を目指したのだった。

こうしてお伊勢まいりは年々盛んになっていく。ほぼ六十年の周期で繰り返されたおかげまいり(後

出)の大移動は別にしても、江戸期の終わり頃には年間数十万人という人々がお伊勢さんに出かけたという。

このお伊勢まいりの仕掛け人は、御師と呼ばれる祈祷師だった。彼らは毎年暮れになると、全国を回って伊勢宮のお祓(お札)や曆を配り、初穂を集めたが、同時に伊勢観光のセールスもした。神宮のご神徳とともに古市あたりの現世利益も説いたらしい。

古市は江戸浅草の吉原などとともに、全国に知られた歓楽街で、「伊勢まいり大神宮へもちよつと寄り」という不埒な男性も多く、弥次さん喜多さんもここで遊んでいる。

●各種ガイドブックも刊行された

お伊勢まいりが盛んになるにつれて、各種ガイドブックも刊行された。

たとえば『伊勢参宮里程抄』(二六九八)、『伊勢参宮案内記』(二七〇七)、『伊勢参宮名所図会』(二七九七)など。

特に宝暦十三年(一七六三)に京都で出版された『伊勢参宮細見大全』八十七丁は、いまの文庫本に近いサイズのポケット版でイラスト入り。京から伊勢周辺の道案内のほか、巻末には「日本橋より品川まで二里、道よし」、「本馬九四文、人足四七文」など、江戸からの道路事情や馬や人足の費用まで記した、ゆき届いた内容だった。

さらにこうした市販のガイドブックのほかに、体験者の道中日記の類もあった。その内容は大体宿营地、宿賃、食事の費用などを簡潔に記した小遣い帳的なものだが、単に自分の備忘のためだけでなく、

多分に、これから伊勢を目指す人へのガイドを意識したものだ。

弥次さん喜多さんの活躍する滑稽本、十返舎一九作『東海道中膝栗毛』も、キャラクターの人気や文章の面白さもさることながら、旅の案内記としても万民に愛読され、当時のベストセラーであった。

●おかげまいり狂騒曲

それにしても、おかげまいりのときは大騒動だったらしい。

おかげまいりというのは、江戸時代の特定の年に爆発的に流行した庶民の伊勢まいりの現象で、いわば抜けまいりの超大型版。神宮のお陰がいただけの年として「おかげ」と書いた笠をかぶり、「おかげ」の旗を持ち、柄杓を腰に差して神宮に詣った。

その主なものは、慶安三年（一六五〇）、宝永二年（一七〇五）、明和八年（一七七二）、文政十三年（一八三〇）に起こっていて、なかかほほ六十年のサイクルで繰り返されている。流行した地域では、天から神宮のお祓や金銀銭、米、豆が降ったなどの奇跡が伝えられている。

その人出は、たとえば文政十三年の例では、三月から半年間の宮川の渡し場の人数が約四百五十八万人、最高は一日で何と十四万八千人に及んだという。当時の伊勢の人口が約二万人、そこへ一日に二、三万から十四万の人間が入ってくるのだから、その騒ぎは想像を絶する。宮川では行列を作って待つ人々を昼となく夜となくピストン輸送。食事や宿泊など御師の屋敷はもとより商人、百姓、後家ややもめに至るまで、分限相応に宿を貸し、神宮の案内もした。町のあちこちに仮小屋を建てて握り飯や餅などの食事、湯茶もふるまった。

●海からやってきた どんどこさん

一方、海路を船で参宮するケースもあった。

二見街道が勢田川と接するあたりに二軒茶屋餅で知られる二軒茶屋がある。昔、ここに二軒の茶屋があったことから名づけられたそうだが、うどんの湊屋は廃業して、餅の角屋だけが残った。天正三年（一五七五）の創業という。

船参宮が賑わった頃、農・漁閑期を利用して尾張、三河、遠江方面から八丁櫓の船で伊勢湾をまわるとき、大湊から勢田川を遡って、ここに参宮船団どんどこさんは上陸した。

その季節、雨の前には東風が吹いて船は速く進んだ。以前ここを訪れたとき、角屋のご主人から当時のお話を聞いた。

「空模様を見て、もうそろそろだなと思っていると、河口のほうから、どんどこどんどこ祭り囃子の音がして、やがて大漁旗がのぼってくるんです」。彼らはここで飛沫に濡れた衣服を着替え、茶屋で一服、うどんや餅で腹ごしらえをして、神宮や古市へ向かった。

明治に入り、伊勢湾に定期の蒸気船が就航するようになってからは、愛知や静岡など各地からの参宮者が激増し、どんどこさんの黄金時代を迎える。

神気に浸って、身も心も清々し

五十鈴川に架かる宇治橋を渡れば、そこはまさに神（森）域であった。向かって右手に見える山々が神路山、左手が島路山、その奥から流れ出た清流が五十鈴川で、別名・御裳濯川ともいう。大昔は橋がなく裳裾を濡らして神域に入ったところから名づけられたらしい。神域の広さは内宮二千五百坪、外宮二千六百坪に及ぶという。

一の鳥居を過ぎて御手洗場に出る。五十鈴川の川面が陽に輝いている。透けて川底が見える。清流に手を浸し、口をすすげば、身も心もスキッと清らかになる心地がする。

森（神）気に浸りつつ、玉砂利を踏む。二の鳥居をくぐり、老松に覆われた参道を内宮本殿に向かう。ゆるやかな石の階を二十数段のぼって板垣御門内に進み、生絹の帳のかかった外玉垣・南御門の前で手を合わせる。

正殿の建物は、戦前ドイツの有名な建築家ブルーノ・タウトによって「世界の建築の王座」と紹介されたが、檜の素木に萱の屋根、切妻、平入りの高床づくり、柱は堀つ立て式。まさに直線の美、単純・素朴で厳かなこの建築は、唯一神明造と呼ばれる。

何事のおわしますかは しらねども

かたじけなきに なみだこぼるる

西行法師は神宮に詣つての感想を、こう詠んだ。

ここは心のふるさとか

そぞろあるけば 旅ごころ

うたた童わらべにかへるかな

こう歌ったのは文豪・吉川英治である。

江戸出立以来、チャランポランの道中を続け、前夜も古市の廓くわで大騒ぎしたばかりの弥次さんと喜多さんだったが、宇治橋を渡り、一の鳥居、四つ足御門を過ぎ、ご本社にぬかづき、さらに宮々を巡るうちは、「自然と感涙肝にめいじて、ありがたさにまじめとなりて、しゃれもなく、むだも言わねば……」の心境になったのだった。

私は思った。この理屈を超えた日本人の感性こそが、日本の庶民信仰の原点なのではないか、と。

二十年に一度、式年遷宮は生命新生の儀式

ご本宮に隣り合って一面に小石を敷きつめた一郭が、次回の遷宮で新しく神さまのお住まいとなる土地であった。

途中省略

本編はダウンロード時間短縮のため省略版でお届けしています。
途中省略なしの完全版をご希望の方は製品版をご「購読」ください。

著者プロフィール

小松 美保子 (こまつ みほこ)

長野県出身。日本女子大学卒業。

生活評論家。著書に『新手紙上手』（実業之日本社）、『葬儀・法事の挨拶と文例』（日本法令）ほか。

神さま仏さま探訪記 ご利益をたどれば日本人が見える

2006年12月15日 電子出版発行

著者 小松 美保子

発行者 瓜谷 綱延

発行所 株式会社文芸社

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-10-1

電話 03-5369-3060 (編集)

03-5369-2299 (販売)

<http://www.boon-gate.com>

© Mihoko Komatsu 2006 Corded in Japan

ISBN4-8355-9219-0

(文芸社発行の通常書籍(紙の本)については、全国書店でお尋ねいただくか、「文芸社ON-LINE」
サイト、<http://www.bungeisha.co.jp> を御参照ください。)

新 06.11.27 M.S.